

「南海トラフ付近で起きる巨大地震と津波で
およそ32万人が死亡する」

8月29日、国が公表した被害想定です。

巨大地震の被害がより現実味を増した今、
私たちがするべきことは何でしょう。

夏休みに岡田小学校体育館で行われた「親子防災キャンプ」では
避難所生活を体験しました。

9月の「松前町総合防災訓練」では
現地訓練など、より実践的な検証も行いました。

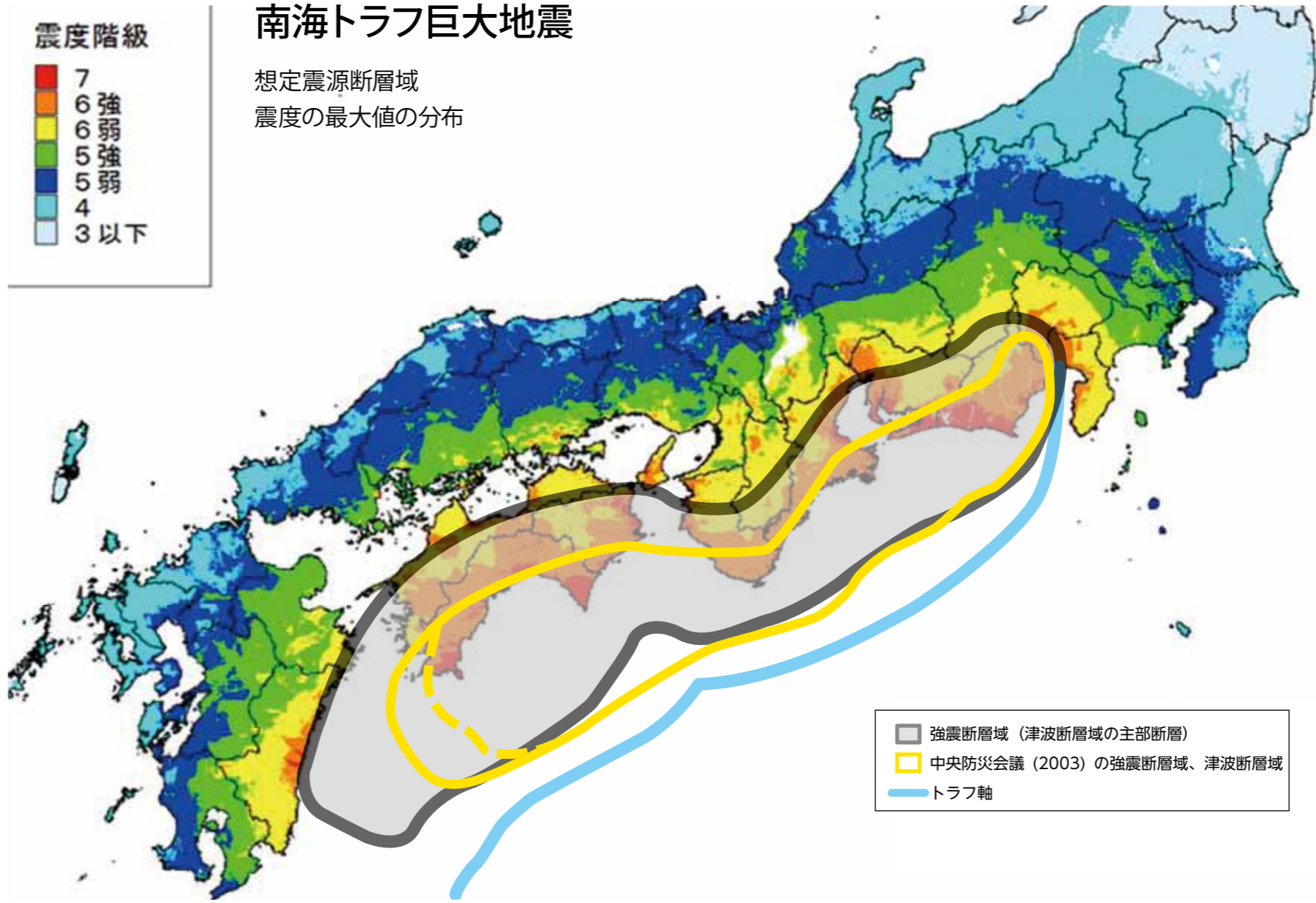
これらから見える松前の防災リアル。
町民みんなが現実的に考えなければならぬときがきているのです。

まさきの 防災リアル



巨大地震の被害予測

国の中央防災会議・南海トラフ巨大地震対策検討作業部会は8月29日、建造物と人的な被害の予測を公表しました。最悪の想定では、全国の死者は32万3千人、建物全壊は238万6千棟と予測。平成15年の中央防災会議の想定と比べて、死者は13倍と大幅に増加しています。県内の死者は1万2千人、建物全壊は19万2千棟に上るとしています。



県内死者数
最大1万2千人

今回の被害想定によると、県内の死亡原因の内訳は、建物倒壊が7400人で最も多く、津波4400人、火災700人です。

国の作業部会は、千年に1回の巨大地震とされる東日本大震災を受け、震源域を東西や陸側にも広げ、津波が巨大化するマグニチュード(M)9クラスの「最大級」を想定。東海、近畿、四国、九州の各地で被害が顕著な4ケースを設定しました。

さらに、震源域▽発生時刻▽風速▽避難行動などでそれぞれ条件を変えて算出しました。

最悪の死者32万3千人が予測されるのは、東海地方の陸側を震源とし、冬季深夜に発生したケースです。

一方で今回の想定では、防災対策の効果も検証されています。耐震化率を現状の8割から9割に上げれば、揺れによる建物倒壊は4割減少。津波の死者も、

地震直後に避難を開始する人が多く、避難ビルが有効活用された場合には、8割減ると推測。最大死者数のケースと同じ地震で、耐震化や即時避難などの防災などが徹底されれば、死者を6万1千人に減らせると試算されています。

町内ではどう備えるか
一人一人の行動がカギ

こうした巨大地震に対する対策として、町は4月から防災担当の副町長を置き、対策を検討しています。現在は、洗い出された課題について「防災対策プロジェクトチーム課題対策班」と「専門分野別のワーキンググループ」で、具体的に検討しているところだ。

今回の新たな被害想定公表を受け、中矢博史副町長は「市町別の被災者数の内訳は出ていませんが、町内では、平成14年の愛媛県地震想定調査で出された最大死者数115人を上回るものと予想されます。津波高については、3月末の第1次報

南海トラフ巨大地震

想定震源断層域
震度の最大値の分布

震度階級
7 強
6 弱
5 強弱
4 弱
3 以下

告の基準となる海面の高さから3.7メートルよりも高い、4.2メートルが想定されています」と話します。津波による浸水域は、従来の沿岸部からの浸水だけでなく、重信川の遡上などによる浸水も想定されていて、最大浸水面積は790ヘクタールです。しかし、これらの原因となる最大クラスの地震と津

波の発生確率は極めて低く、巨大地震発生後、第1波の1メートル程度の津波が到達するまでに2時間程度の猶予があります。「過度の心配により、避難をあきらめて助かる命を落とすとしてしまわないようにすることが大切です。町民の皆さんには、日ごろから家庭、地域や職場で災害に対する話をしてもらい、『強い

揺れが起きれば逃げる』という基本を認識してもらいたい」と中矢副町長。私たち一人一人が、防災意識を持って行動していれば、防げることはたくさんあります。非常に大きな津波が起こりうるということを念頭に置き、強い揺れが起きたらどう行動するかということをしつかりと認識しておくことが重要です。

松前町における「南海トラフ巨大地震」津波高・浸水面積

(H24.8.29 国の南海トラフの巨大地震モデル検討会 第2次報告)

	最大津波高 (メートル)	津波の最短到達時間(分) / 津波高1メートル	最大震度
第2次報告 (H 24.8.29)	4.2	133	6強
第1次報告 (H 24.3.31)	3.7	—	6強
中央防災会議 (H 15.9.17)	2.4	—	6弱

※最大津波高は、東京湾標準海面(海拔0メートル)が基準になります。

	浸水面積(ヘクタール) / 今回発表(最大クラス)			
浸水高	1センチ以上	30センチ以上	1メートル以上	2メートル以上
浸水面積	370	300	110	10未滿

※浸水高は、地面から浸水する高さです。

副町長(防災担当)
中矢博史

Nakaya Hiroshi



今後、防災対策プロジェクトチームでまとめた対策は、「松前町災害に強い町をつくる会」を設置して、住民、企業、有識者の皆さんからさまざまな意見をもらい、町の実情にあったものにしていく予定です。対策を計画的に行っていくことで、備えも着実に向上していくものと考えています。

村上詠亮くん
武彦さん
(上高柳)

Murakami Eisuke
Takehiko



詠亮くん…段ボールで寝たり、備蓄食を食べたり、普段体験できないことが体験できて、いつも当たり前だと思っていた生活を見直すきっかけになりました。武彦さん…たった3日でしたが、長く続く避難所生活が想像できて、体験してみないと分からない辛さがありました。万が一に備え、少しずつでも取り組んでいきたい。



長岡 渉くん
栞ちゃん
(西高柳)

Nagaoka Wataru
Shiori

渉くん…パーティー作りでは協力することの大切さを学びました。水上安全法と応急手当が勉強になりました。必要としている人がいたらしてあげたいです。栞ちゃん…2日目の夕食作りでみんなで協力してできたことがうれしかったです。いろんな体験を通して、命を大切にすることを学びました。



避難所生活の事実

2泊3日で小学生たちが避難所生活を体験する「親子防災キャンプ」。限られた条件の中での生活。参加者はどんな感想を持ったのでしょうか。

7月27日、夏休み中の岡田小学校体育館に、続々と人が集まってきました。一人一人に手渡されたのは、かんぱんとペットボトルの水。これから2泊3日の避難所体験生活「親子防災キャンプ」が始まります。

県教育委員会が今年初めて主催。もし南海地震が起きたら、避難所ではどんな生活が待っているのか、小学5・6年生と保護者、地域の人たちおよそ70人が体験しました。

まず避難所の中で必要となるのが、寝るスペースの確保です。一枚ずつ配られた段ボールで、パーティーション作りに挑戦。限られた材料を工夫して、一人用から家族、グループ用まで、それぞれのプライベート空間を確保します。この中に小さな段ボールを広げてシートを敷けば、寝床の完成です。

みんなで作った「ペットボトルキャンドル」に火を灯し、午後10時消灯。「暑いね」「蚊がいる」など、子どもたちはなかなか寝付けられない様子でした。

2日目の朝、参加者は6時半の起床時間前にすでに起きていました。河合凌太郎くんの母・妙子さんは「暑いし、隣の人少し動いただけで音が聞こえるし、眠れませんでした。実際の避難生活ではこれが何カ月も続くんですよ。」と話していました。

朝食は備蓄食。スポーツドリンク、ソーセージ、缶詰のパン。反応は良好。朝食後、この日は自衛隊や消防など、災害のプロたちからいざというときに役立つさまざまな知恵を学びました。

地震後は、火災で大勢の人が亡くなると予想されています。火事になったら家の中はどうなるのか。煙体験をした参加者たちは「家の中が見えない」と苦しそうな表情を見せていました。火災の恐ろしさを知った後は、消火訓練で火災に備えました。

一方、水の事故に備え、服を着たまま水に落ちてでも落ちついて行動できる水上安全法も学びました。

たくさん動いて学んだ後は夕食作り。ごはんは保存食のアルファ化米。おかずは

配給された物資を使って調理します。油あげと野菜を卵でとじれば「あぶたま汁」の完成です。これは被災して20日後に食べられる食事を想定したメニュー。ようやく温かいものを口にして、参加者はほっと一息ついたようでした。樋口典子教諭は「自分たちで作ることで、してもらうんじゃなく、自分たちで生きていくんだと実感できます」と話していました。

いざというときに備えて、自分たちにできることは何があるのでしょうか。

長岡渉くんは「パーティーション作りは人と協力しないとできませんでした。応急手当を習ったので、手当が必要の人がいたらしてあげたいです」と笑顔。村上詠亮くんは「自分でできることは自分で行うことが大事だと思いました。帰ったら家族で避難経路を確かめたいです」と話していました。

子どもたちは、避難所生活のルールやマナーを学び、防災について考え、災害に対する意識や態度を養ったようです。

訓練から見える実態

地域の实情に応じた、さまざまな場面を想定して行われた「松前町総合防災訓練」。

「松前町総合防災訓練」は9月2日、松前公園で開催され、関係機関や地域住民など約900人が参加しました。

東海・東南海・南海沖を震源とする震度6強の地震が発生。町内で家屋の倒壊や火災が発生し、ライフラインは寸断。大きな津波発生も予想されるため、沿岸部の住民に対して避難指示



を発令したという想定で行われました。

今回は、災害対策本部運営訓練、地域住民の避難訓練、救出救護訓練などを実施。これらの訓練では、自

主防災組織や民間ボランティア団体と連携し、地域の实情に応じたさまざまな場面を設定。参加者自身で判断して、避難や救助活動を行うなど、例年より実践

的な訓練が行われました。救助訓練に参加した渡部登さん（新立）は「人間を運ぼうとしたら、思わん重かった。若い人の力があると感じた」と語ります。仲島政夫さん（同）は「訓練に参加して見つけた課題がたくさんあります。消防団に教えてもらっただけでなく、自分で考えて行動することが重要だということを感じました」と話しています。



榊山春汰くん
関谷 樹くん
岡田小少年消防クラブ
Sakakiyama Shunta
Sekiya Tatsuki

パケツリレーで消火訓練をしました。火を消すのにこんなに時間がかかるとは思いませんでした。火事の怖さと協力することの大切さを学びました。



村上朋子さん
渡部 登さん
仲島政夫さん
（新立・宗意原）
Murakami Tomoko
Watanabe Noboru
Nakajima Masao

いつもの訓練より、自分たちで考えて行動する場面が多く、大役役に立ちました。連携の難しさも感じたので、日ごろから情報を共有しておきたいです。

特に、今回の避難訓練では、防災行政無線の緊急地震速報を聞いて、各地区の避難所実際に歩いて避難する、現地訓練が行われました。

このうち筒井地区では、各組単位で要援護者をリヤカーや車椅子で運び、避難場所である松前公園体育館まで歩いて避難。避難者名簿を提出し、避難状況を報告しました。体育館には200人が集まり、避難者全員で、避難経路の検証も行いました。

訓練に参加した70代の夫婦は「避難経路を歩いたのははじめてでした。歩いてみたら、古いブロック塀があつて危険な場所があつたので、みんなで検証して



ルートを変更しました。今回は昼間だったけど、夜間の避難も体験しておかないと「参加してみないと分からないことがたくさんありました。訓練に参加したことで、参考になる意見も聞くことができて大変よかったです」と話しています。

家庭でできるリアル訓練

家族で次のことを話し合ってみましょう。

- 家族一人一人の役割を決めておきましょう。
- 家族との連絡方法を決めておきましょう。
- 避難経路を確認しておきましょう。
- 非常持ち出し品や備蓄品を確認しておきましょう。
- 家の危険なところのチェックをしましょう。
- 耐震診断を受けましょう。

【参考】防災カード

緊急時の避難場所、避難方法やその他避難時に必要な情報をコンパクトにまとめた「松前町防災カード」に詳しく載っています。



●総務課危機管理係 ☎ 985-4103

訓練に参加した人の多くが「参加してみればじめて知った」「○○だと感じた」「○○しようと思った」と話します。訓練から、さまざまな実態が見えてきたのです。

しかし、訓練は、ただ参加さえすればいいというわけではありません。これからは、いかにリアルに実行するかが大事です。

訓練で大事なことは、何ができて、何ができないかをまず知ること。それらは、やってみないと分からないことが多いものです。町主催の大規模な訓練で

なくても、避難経路の検証など、やろうと思えば自分（個人）でできることはたくさんあります。

今回の南海トラフ地震被害想定、防災キャンプや防災訓練に参加した人の声を、身の回りの安全を見直すきっかけととらえて、一歩踏み出しましょうか。家族と災害時の連絡方法を話し合ったり、防災カードに目を通したりしてみることも、大事な一歩です。

今こそ、行動を始めるときです。あなたはどうな一歩を踏み出し、どんなリアルを体験しますか。